メディア教育研究　第2巻　第1号
Journal of Multimedia Aided Education Research 2005, Vol. 2, No. 1, 29－42

特　集

オンデマンド授業流通フォーラムによる新たな教育への取り組み

高木　直二

オンデマンド授業とは、いつでもどこからでも自分の都合に合わせて学習できる授業のことで、事前に収録された講義を学生一人ひとりがインターネットを通じて受講するeラーニングのことを言う。現在、オンデマンド授業は大学における正規の授業方法として位置付けられており、その可能性には大きな期待が寄せられている。筆者の所属する早稲田大学においては2003年4月よりオンデマンド授業方式による通信教育課程を開設している他、通学制においても多くのオンデマンド授業が実施されており、オンデマンド授業が教育方法の一部として定着しつつある。しかし、日本国内の状況を見れば、オンデマンド授業を実施するための技術面、コスト面、運営面等の課題から、いまだ十分に普及・定着しているとは言えない。今後、オンデマンド授業を普及し学生の多様な教育ニーズに応えていくためには、各機関の個別の取り組みだけでは限界があり、高等教育機関のみならず産業界を含めた幅広い英知を結集する必要がある。そのための取り組みとして、2005年4月に〈オンデマンド授業流通フォーラム〉が設立された。本稿では、オンデマンド授業の特徴、教育効果、実施状況、問題点に言及するとともに、〈オンデマンド授業流通フォーラム〉の将来像に触れ、高等教育機関におけるオンデマンド授業の普及に向けた活動を紹介する。

キーワード
オンデマンド授業、双方向コミュニケーション、LMS（Learning Management System）、教育コーチ、オンデマンド授業流通フォーラム

1．はじめに

オンデマンド授業とは、いつでもどこからでも自分の都合に合わせて学習できる授業のことで、事前にスタジオや教室で収録された講義を学生一人ひとりがインターネットを通じて受講するeラーニングのことを言う。

日本でインターネットを用いた遠隔教育に単位を付与することができるようになったのは、周知のとおり大学設置基準が改正された2001年度からである。オンデマンド授業は正規の授業方法として位置付けられ、現在、通信制では卒業に必要な124単位のすべて、通学制では60単位までをこのオンデマンド授業で習得することが可能となった。そして2004年度、文部科学省は「ITを活用した実践的遠隔教育」の推進を「現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム」の一環として位置付けた。

価値観の多様化が著しい昨今、人それぞれが描くライフスタイルはさまざまであり、働く場の選択肢が広がるにつれて、実践的な教育サービスを求める声は高まる一方である。社会人となってからもさらに教養を高め、あるいはスキル、キャリアのステップアップをめざして、働きながら学びたいと希望する者が増加し続けている。このような状況のなかで高等教育機関においてもニーズに見合った良質の教育を時間的、空間的にフレキシブルなかたちで広く提供することは使命ともいえるであろう。場所や時間の制約を受けながらも学ぶ機会を求める者に対してオンデマンド授業などの遠隔講義を整備し、質の高い教育プログラムを提供することは今や世界の趨勢ですらある。

とはいえ日本の現状をみると、オンデマンド授業を効果的に実施するための下地が確固として築かれているとは言いがたい。単位認定の問題をはじめメディア利用の際の著作権法に関する配慮などの問題等々、まだまだ緒についた段階で経験が浅いだけに克服すべき多くの課題が残されている。

高等教育においてインターネットを活用する利点として、

・講義ビデオおよび講義資料の提供が容易であること
・時間と場所を選ばないコミュニケーションが可能であること
・外部資料を参照しやすいこと

早稲田大学

・講義運営の効率化がはかられること

などが挙げられる。かつての回線容量による制限の問題はほぼ解消し、すでに文字や静止画をはじめ動画や音声など大容量のデータがリアルタイムで配信できるようになってきており、通信環境の問題はない。課題は、これらの利点を具体的にどのように展開するかということである。

２．早稲田大学におけるオンデマンド授業の展開

2.1　オンデマンド授業の構成

〈講義コンテンツについて〉

早稲田大学のオンデマンド授業におけるコンテンツには、教員紹介、シラバス、講義ノート、試験、授業評価アンケートなどがあるが、もちろん中心となるのは講義映像である。講義ビデオは通常、スタジオあるいは教室でのライブというかたちで事前に収録され、これに電子教材を組み合わせてつくられる。スタジオ収録された講義ビデオはスライドを使ったテレビの教育番組のようでわかりやすい、教室でのライブ収録は臨場感がゆたかである、とそれぞれの特徴がある。今後、受講者の反応を検証しながら、より効果的なさまざまな授業形態が模索されることになるであろう。

講義コンテンツは、必要に応じて随時内容が更新できるよう設計されていることが望ましい。この観点から現在、早稲田大学で実施している講義コンテンツのタイプを具体的に紹介しながらこの内容更新の容易性について検証してみる。

まずは代表的なスタジオ収録型、このタイプは内容のポイントごとに章分けするなど分割して講義を組み立てるので設計自体もシンプルで更新も比較的容易だ。主たるスタイルは講師映像と静止画教材、講師映像と動画教材を組み合わせた二つで、どちらも同期型である。早稲田大学では前者について制作ツールを完備している。

次いで、実際の対面授業における講義を収録してビデオ映像としてコンテンツ化する教室収録型、これは対面授業をうけているような臨場感を強調したタイプである。ただし、収録の際には相当の手間がかかる上に、音声の取り込み、講師映像および文字や図表などのテキスト部分の映像が不鮮明となりがちで工夫が必要となり、教材の差し替えも困難で講義のユニット化には不向きである。また、実際の講義に参加している学生向けの授業であるため場合によってはオンデマンド受講者が疎外感を覚えたり、オンデマンド受講者を意識しすぎるとその逆の現象も生じかねない懸念もあるので一長一短である。

そのほかにも、担当教員があらかじめWebサイトに準備した教材を見ながら、講義の導入部およびまとめ部分を収録した映像を活用して学習を進めるWBT方式のタイプもある。この場合、担当教員が教材を準備しなければならず、その分負担がかかることになる。

いずれにせよ講義コンテンツの制作にあたっては、担当教員の考える教育効果が最大に発揮されるような方式を事前に十分な検討を加えた上で選択、判断することが重要である。

制作スタッフの側としては、コンテンツの再収録を含めた更新の可否についての確認はもちろん、教材の差し替えが可能なユニット化された講義にしてもその頻度、教材で使用する図や写真の有無、提示方法、ポインティングの必要性等々の細かな点について、担当教員と事前によく打ち合わせ、展開しようとする授業に最適と思われる方式をこれまで制作してきた経験を踏まえて提案・提示できる態勢を整えておく必要もあるだろう。

また、受講者側の、PC、ネットワーク環境への配慮も重要だ。高品質の動画を配信しようとすれば、受信側の環境によってはネットワークに負荷がかかりすぎて再生に不具合がでるなどの問題が生じるし、講義コンテンツの再生には汎用性があること（Windowsのみならず Macでも再生できること）や再生のためのソフトが無償で入手できることなどの配慮が必要であろう。

テキストおよび補助教材の制作は原則的に教員が担当するものだが、スケジュールに追われて収録が遅れ気味となるケースが多く見られ、授業の実施に支障をきたさないよう進捗管理の徹底が課題となる。場合によっては、PPTなどの作成を支援する態勢も準備しておく必要がある。

〈コミュニケーションについて〉

オンデマンド授業で利用される主たるコミュニケーションツールはBBS（電子掲示板）であるが、そのほかにも、お知らせ、アンケート、レスポンスアナライザー、レポート提出、テスト、等々の機能が必要であり、これらほぼすべての活動がWeb上で行えるように設計されていることが前提となる。とくに個別に対応する必要がある場合には電子メールを使用することもある。

インターネットのネットワークを介して結ばれた人間関係は、むしろチームで行う作業に適しているという側面も持つ。オンデマンド授業の受講者は、各自BBSを介してインターネット・ディスカッションに臨める。コミュニケーション・ツールとしてのBBSは、授業中を含め24時間開放することが可能である。早稲田大学では、この点に着目しインターネットの特性を十分に引き出し、独自に先進的なネットワーク型の教育手法が編みだされ、対面式授業では実現しにくい「学びのコミュニティ」が生み出されることも可能であることが立証された。

BBSには、議論を活発化させる効果がある。テーマごとに少人数グループを形成することが可能であり、対話型学習を行いやすくする効果が見込めるのである。ひいては、知識の伝授に重点がおかれぎみの従来スタイルか

ら、学生自らが与えられた課題を解決すべく知識を出し合い、ディスカッションなどを経てまとまった結論を導き出すという「協調型学習」ともいうべき問題発見解決型の学習活動を誘発させる効果が期待できる。

BBSを介して学習コミュニティが創出されれば、自己表現力にとぼしいと思われがちであった学生の発言・行動に対する消極性が緩和され、参加意欲の醸成と自己表現力の獲得を引き出す効果も期待できる。また、他大学学生と交流する機会が増えることで、知的関心もより喚起される可能性も高まる傾向がうかがえる。

このように利点の多いネットワークによるコミュニケーションだが、もちろん対面型授業を通じた教育効果や人間関係の意義が否定されるものではなく、ネットワーク型の交流手段が従来型に取って代わるわけではない。今ある教員と学生および学生間における交流の手段に新たな選択肢、環境が加わるだけのことである。ただ、「バーチャルなコミュニケーションは希薄な人間関係を生み出す」といった議論が適切でないことはすでに実証されているように思われる。

〈LMS諸機能について〉

LMS（Learning Management System）とは、オンデマンド授業を実施するための学習管理システムのことであり、早稲田大学ではOIC（On-demand Internet Class）と称している。受講生はこのOICを通じて講義にアクセスし、小テスト、レポート、アンケート、ディスカッションもすべてオンラインで実施される。なかでもBBSを通して展開されるディスカッションについては、運用次第で通学制の授業に勝るコミュニケーションの機会が確保されるという利点が強調できる。

OICの機能には、BBS、レポート、小テスト、アンケート、学習履歴管理などがあり、とくに授業運営にかかわる諸機能が充実しているので現状でも高い評価を得ている。LMSのなかには、講義の視聴、BBS、テスト等々のメニューがばらばらなものもあるが、OICは、動画コンテンツの有無にかかわらず、授業の全体像すなわち各回講義の構成、テスト、レポート、アンケートの有無などが一覧でき把握しやすいことから、教育支援ツールとしての利用は活発である。

〈ティーチングスタッフについて〉

早稲田大学におけるオンデマンド授業は、学生に対するきめの細かい個別教育を実現するために教員と教育コーチによるチームティーチング方式を採用している。教育コーチは原則大学院生で、質疑応答、コーチング、学習支援、教員との連絡調整を行う役割を担っている。

早稲田大学人間科学部通信教育課程（eスクール）では、受講生の多くは働きながら学ぶ社会人であることから学習意欲はきわめて高く、授業に対する要求も厳しい。しかもコンテンツはオンラインで公開されるので、担当教員は常にベストの講義を行うことが要求され、その結果、学生からは「わかりやすい」との評価が寄せられているようである。

しかしながら、講義コンテンツの実施、管理に強いら

表1　【オンデマンド授業の構成例】　（半期2単位）

第1週	○事前ガイダンス（オンデマンド授業について）	
第2週	○オリエンテーション（授業構成の説明、担当教員の自己紹介、教育コーチの紹介）	
第3週	講義＆BBSディスカッション①	◇小テスト①
第4週	講義＆BBSディスカッション②	◇小テスト②
第5週	講義＆BBSディスカッション③	◆小レポート①
第6週	講義＆BBSディスカッション④	◇小テスト③
第7週	講義＆BBSディスカッション⑤	◇小テスト④
第8週	◎中間討議／BBSライブディスカッション	
第9週	講義＆BBSディスカッション⑥	◇小テスト⑤※中間討議のフォロー公開
第10週	講義＆BBSディスカッション⑦	◇小テスト⑥
第11週	講義＆BBSディスカッション⑧	◆小レポート②
第12週	講義＆BBSディスカッション⑨	◇小テスト⑦
第13週	講義＆BBSディスカッション⑩	◇小テスト⑧
第14週	◎最終討議／BBSライブディスカッション	
第15週	●〈最終テスト（レポート）〉	※最終討議のフォロー公開

備考）・オンデマンド授業の講義は各回1週ごとに更新され、1回の講義時間は50分（1章15分×3章＋問いかけ5分）、公開期間終了後の講義はバックナンバーとして視聴可能。
・中間討議および最終討議はテーマを設定、教育コーチ担当のもとBBSを活用しリアルタイムで実施する。討議終了の翌週には担当教員のフォローとして、BBS討議の内容を踏まえたコメントを収録（15〜30分程度）しシステム上に公開する。

れる負担は従来以上となるため、これを軽減し、また、学生へのきめ細かな指導が行えるよう、大学院生を中心とした“教育コーチ”を配する必要がある。こうした教材の作成や授業運営の円滑化をはかるべく支援体制が整えられているからこそ、これまで学生からは通学制と同等もしくはそれ以上の教育効果があると高い評価を得ることができているといえよう。

教育コーチとなる大学院生について見てみると、教材の作成支援やBBSを介した学生に対する指導やコミュニケーションを繰り返すなかで鍛えられ、教育者としての実力を確実に伸ばしているようである。さらに生活の糧が得られるなどの利点も見逃せない。

〈授業構成の例〉

オンデマンド授業の構成は様々であるが、後述するオンデマンド授業流通フォーラムで実際に行われた授業（半期2単位、全15回）を例として挙げると、第1週目にオンデマンド授業についてのガイダンス、2週目にオリエンテーションが配され、以降、オンデマンド授業＆BBSディスカッション／10回、中間・最終討議（BBSライブディスカッション）／2回、最終テスト（レポート）／1回が実施され、この期間中には小テスト／8回、小レポート／2回が課されている。授業終了後には任意参加のかたちで対面型の交流セミナーも実験的に行われた。授業構成例をまとめると「表1（31頁）」のようになる。

2.2　オンデマンド授業の特徴

オンデマンド授業の特徴を学ぶ側からの利点で見てみると、まず、時間的、空間的な制約を受けずに受講できる時空超越の利便さが挙げられる。次いで、講義コンテンツを納得がいくまで繰り返し視聴できるので自己のペースで学習を進めることができる点、講義ごとに毎回実施される小テストあるいは小レポートがオンラインで提出できるという手軽さが挙げられる。講義そのものについても、時間をかけて事前の準備がなされていることもあって、従来型の教場講義よりもむしろポイントがきちんと整理されていて「わかりやすい」とおおむね好評である。

さらに、双方向性に優れたインターネットならではのBBSの活用が挙げられる。受講生は、BBSでの発言はすべての受講生に公開されるので、書き込まれた他の受講生の意見を参照することができ、自身の考えの整理に大いに参考となっているようだ。また、BBSを介して実施されるディスカッションによって受講者間のコミュニケーションが生まれ、共同学習的な側面が引き出される効果も見られる。教室内に閉じ込められた対面授業によるスタイルでは得られない効果が期待できるのではないか。

オンデマンド授業の内容は、原則的に通学制のそれとまったく同じである。むしろ教育コーチが配されている分、オンデマンド授業の方がコミュニケーション・ツールの活用による個別対応などの面で受講生に対して手厚いケアがほどこされるため、学習の幅に広がりが生まれ理解の深度も増す傾向がうかがえる。

2.3　オンデマンド授業の教育効果

オンデマンド授業は、講義ビデオを試聴し講義資料を閲覧することで終わるわけではなく、教員と学生および学生間におけるコミュニケーションがあってはじめて成立する授業である。オンデマンド授業ではBBSを活用することでコミュニケーションの双方向性が確保されており、教員と学生および学生間におけるインタラクティブな環境の構築は比較的容易である。その機能の活用をいかに徹底・充実させることができるか、すなわち受講生へのきめ細かな個別指導をどれだけ徹底・充実させることができるかによって、引き出される効果の度合いも違ってくるはずだ。

したがって、オンデマンド授業がもたらす教育効果として一番に期待されるのは、学習者の自発性、主体性を啓発することによって自己学習力の促進、向上を実現することである。問題解決型の学習姿勢へと学生を誘導することは高等教育の基本課題ともいえるが、オンデマンド授業は教員・受講者間におけるインタラクティブ性を高めることについては従来型の授業にも勝る可能性を秘めていると言えよう。

一方、オンデマンド授業を実施する上で制作された新たなかたちの電子教材が蓄積されていけば、学習教材の多様化をはかることができる。オンデマンド授業ではスライドやワークブックなどを事前に準備する必要はあるが、その過程で費やされるエネルギーは教員や教育コーチ自身の質的向上にもつながっている。

また、オンデマンド授業の採用は、講義コンテンツの数が豊富になればなるほど、学習機会の偏在性を改善することにもつながる。

早稲田大学においては、オンデマンド授業は講義コンテンツのオープン化が前提にあり、教育の連携による効果を視野にいれて取り組まれてきた。単に授業の効率化を目的に発想されたものではない。

大学が教育の情報化を推し進めるのは、「知的財産を幅広く開放し多くの間で共有することで教育研究の発展に資すること」が大きな理由のひとつでもある。今後、オンデマンド授業がさらに発展・普及すれば、講義コンテンツそのものが教材と共に公開・開放されるようになるのは自然な流れではなかろうか。

３．オンデマンド授業の実際／早稲田大学におけるオンデマンド授業実施の現状

早稲田大学におけるオンデマンド授業の推移は、2001年に文学部を中心に通学制の一部でオンデマンド授業が採用されたのが端緒である。その後2003年に人間科学部に通信教育課程（eスクール）が開設され、実技や実習などのスクーリング科目を除く全授業がオンデマンド授業で実施されるようになった。講義コンテンツは毎週入れ替えられ、その週内であれば何度でも受講が可能である。質疑応答や意見交換をBBSで行い、試験・レポートもオンラインで提出するというスタイルも確立された。

早稲田大学における本格的なオンデマンド授業の展開によって得られた成果を見てみることにする。早稲田大学で実施しているオンデマンド授業の科目数は通信教育課程を含めると、一大学における実施状況としては国内で最も規模が大きいのではないかと思われる。過去3年間の科目数の推移は次のとおりである。

【オンデマンド授業科目数の推移】

年度	授業科目数（クラス数）	eスクールにおける授業科目数（クラス数）
2003年度	131（259）	43（ 96）
2004年度	174（302）	87（175）
2005年度	340（671）	190（371）

このような成果が得られたのは、授業配信システムの監視、24時間対応のオンデマンドヘルプデスクの運営、教材の著作権処理の実施など、オンデマンド授業を支障なく円滑に実施するための体制をいち早く整備できた結果である。早稲田大学では、教務部情報企画課、メディアネットワークセンター、遠隔教育センター、人間科学部、早稲田大学ラーニングスクエア株式会社などの関係機関が一丸となってオンデマンド授業の推進に取り組んでおり、また文学部を母体とする戸山リサーチセンターなどが推進役となって先進的な授業を実施するとともに、シンポジウムの開催を通じて実際の取り組み事例やその効果、実施過程で浮かび上がった課題を公開するなどオープンなかたちで積極的な活動を行っている。

ここで、オンキャンパスでオンデマンド授業を実施する際に留意すべき問題に触れておこうと思う。それは、従来の集合教室型授業とオンデマンド授業の二極化ともいうべき問題である。大きく異なる二つの教育形態の同一キャンパスにおける混在は混乱を招かないか、という懸念である。

オンデマンド授業が多様なニーズへの対応という方向で実施拡大されていくのは自然の流れと思われ、閉塞感さえ覚える現行の高等教育のあり方に風穴をあける新しい教育スタイルとなることは間違いないであろうが、授業運営の効率化を優先して安易に置き換えられていくべきものではないことは改めて指摘しておかなければならない。要は二つの授業形態がもつ適性の判断で、オンデマンド化する科目の必然性を明確に示し確認する必要がある。また、学ぶ側が時間割の拘束から解放され履修科目の選択が柔軟に行える利点もオンデマンド化の重要な要因ではあるが、受講生には事前に十分の説明がなされるべきであろう。

４．オンデマンド授業普及上の問題点

4.1　運営コスト面の問題点

オンデマンド授業の実施にあたって費用の問題は深刻である。事実、これが普及・拡大のネックとなっている場合が多く見受けられ、オンデマンド授業流通をはかる上で頭の痛い課題となっている。

ある高等教育機関が単独でオンデマンド授業を実施しようとすれば、運営面ではまずサーバー（ホスティング、ハウジング、バックアップ機器、負荷分散装置などを含む）の設置、配信帯域保証や機器の死活監視などを含むネットワーク環境の整備、学内での受講機会を保証するためのPC環境の整備（自宅など学外からのアクセスは除く）、LMSの導入、システム利用における不具合の対応と問題を解決するためのヘルプデスクの運営、コンテンツ制作におけるビデオ収録、オーサリング（コンテンツ制作における文字や画像、音声などのデータ素材をプログラムとして関連付ける作業）、サーバー登録、動作検証などの費用がかかり、トータルでは膨大な額となる。たとえオンデマンド授業を実施したいという意向を強く持っていても、初期費用をざっと見積もっただけで二の足を踏まざるを得ない状況であることは容易に理解できる。

オンデマンド授業を安価に実施する方法のひとつとして、アプリケーションソフトウェアをインターネット経由で提供するいわゆるASP（Application Service Provider）方式のサービスを利用することも考えられるが、今後、詳細に検討する課題であろう。

4.2　システム運営面の問題点

オンデマンド授業のコンテンツを配信する物理的な環境を整えても、肝心のコンテンツの制作に加えて、システムを支障なく円滑に運営するためのノウハウの取得は不可欠である。当然ながら高度な技術的知識と経験は時間と手間をかけて蓄積されなければそれを応用、活用することはできないので、腰をすえた組織的な取り組みが必須となる。

このようにオンデマンド授業の普及の前に立ちはだか

る費用の問題があり、さらにシステムの運営面でもまた膨大な経費と時間を要する高度なノウハウの取得という高いハードルが存在する。このハードルが越えられるような方策、しくみづくりは、高等教育機関全体で取り組むべきテーマといえる。

4.3　授業運営面の問題点

オンデマンド授業の運営に際しては、とくにコンテンツ制作の初期段階では教員にかなりの負荷がかかるため、制作・運営上のノウハウをもったスタッフによるサポート体制がなければ成功は覚束ないと思われる。しかもこのサポートスタッフは、オンデマンド授業の意義、メリット・デメリット両面をしっかりと理解した上で教育的視点を含めた助言を行っていかなければならない。

一方、日本の高等教育風土にオンライン教育はなじまないと、違和感を覚える教員が多いことも事実であろう。教育とくに高等教育は教員と学生が教室で対峙し、その緊張感の中でこそ成立するというのもごく自然な考えである。確かに、単に授業運営の効率性が重視されてそのメリットを追求するあまり、質よりも量といった方向の動きが出てくる懸念は否めない。

また、オンライン教育が進展、普及すれば、大学間におけるネットワークの構築が発想されるのは自然の流れだが、その際、従来の壁を超えて他の大学と手を組むことの抵抗感をぬぐいきれない状況が生じるケースも考えられる。各大学の個性の尊重が理由とされる場合もあるが、現実的には大学間において学力格差が存在することのほうが深刻な問題となる可能性もある。オンデマンド授業の流通、相互活用が進めば単位互換の問題をどう処理するかは重要な課題となるであろう。

編入学が一般化しているアメリカなどでは、国内外を問わずそれぞれ独自の基準にもとづく「単位互換式」なるものがある。各地に単位認定協会があり、第三者の立場から客観的に教育の質を査定する体制が整えられているという。日本においては、入学試験の難易度（偏差値）、あるいは卒業後の就職率といった格付けのようなものは存在するものの教育内容の質そのものを判断する基準はない。しかも、単位認定を前提とする大学間ネットワークのしくみにふさわしい「単位認定基準」を示す下地がないのが現状である。

5．オンデマンド授業流通フォーラムの設立

5.1　オンデマンド授業流通フォーラムがめざすもの

現況を見る限り、オンデマンド授業が広く社会に受け入れられることを期待しても、各高等教育機関それぞれが単独に取り組むだけでは、時間的にも資金的にも限界があるように思われる。

オンデマンド授業を普及、拡大させるカギは、多くの大学が手を結んで、特色ある講義コンテンツを正規科目としていかに相互流通させることができるかにかかっているのではないか。オンデマンド授業がめざすべき方向は、マスプロ教育の弊害、すなわち大教室に多人数を詰め込む知識伝達偏重型の授業から脱却し、自らが課題を発見、発掘、解決していく学生の能力育成を目的としたいわば個別指導による問題発掘・解決型といえる新しい教育スタイルを確立することである。これが流通する環境をしっかりと築き定着させれば、多様化、高度化、オープン化という時代の要請にも十分に対応し得るはずだ。個々の大学の壁を超えた学習環境が整えば教育改革のトリガーとなることもおおいに期待できるであろう。

そこで2005年4月、「オンデマンド授業流通フォーラム」（FOLC：Forum for On-demand Lecture Circulation）が、高等教育機関および関連企業の連携による「知」の共同体を創出することを目的に設立された。早稲田大学がキャンパスのデジタル化の推進を目指して協賛企業と設立した「デジタルキャンパスコンソーシアム（DCC）」もFOLCの活動を支援している。発足時のFOLCの会員構成は、学校会員（大学、短大、専門学校）46校、コンテンツ制作や授業配信を支援する企業会員23社であった。数年後には、参加学校機関100校、提供する授業科目数100科目を実現することを目標としている。

会員となった高等教育機関の間でオンデマンド授業の相互流通が進めば、会員校は他会員校の優れた授業を自校の科目として活用し学生の多様な学習意欲に応えることができる。しかし一方、〈オンデマンド授業の相互流通が進むと個性化を追求する各大学の努力に水をさす〉との指摘がある。だが、各大学が学生の要請に応えてすべての領域・分野の授業を整備することは実質的に不可能であり、不足する領域・分野を相互に補完するメリットの方が勝るのではないか。また、教場における対面授業が主流であり続けることに変わりはなく、導入する講義コンテンツを適切に選択すればよいだけのことである。教育の質を高める観点からは優れた授業を相互補完する仕組みづくりの流れは自然で、むしろ授業の相互流通によって各大学の個性を浮き上がらせることができ広く社会に知らしめる良い機会となるのではなかろうか。いずれにせよオンデマンド授業の普及をはかるには、FOLCがプラットフォームとしての役割をしっかりと果たし、質的に優れた講義コンテンツをいかに数多く流通させることができるかが当面の課題であることは間違いない。

5.2　フォーラム設立の経緯

ここで、FOLCの設立に至る経緯について記しておく。早稲田大学は2003年度にオンデマンド授業の評価実験を吉備国際大学および九州保健福祉大学と共同で実施の後、2004年度からFOLCの設立に向けてFOLC設立準備研究会を発足し、慶應義塾大学とともに事務局となって

表2　【オンデマンド授業流通フォーラム設立準備研究会の活動】

2004年4月	準備会合／研究参加校19校（参加者約50名） ※主な内容／FOLCの枠組みとコンテンツ制作についての提案
2004年6月	第1回設立準備研究会／教育機関31校、企業関係26社（参加者約120名） ※主な内容／総務省講演（演題「IT政策とオンデマンド授業」）、オンデマンド授業事例報告、コンテンツ募集について
2004年9月	第2回設立準備研究会／教育機関32校、企業関係17社（参加者約120名） ※主な内容／講演、事例報告、運営ガイドライン承認、協力会社募集について
2004年10月	シンポジウム／教育機関および企業ほか100機関（参加者約400名） ※基調講演、体験講演（大相撲大島部屋・旭鷲山関）、事例報告、パネルディスカッション
2005年1月	第3回設立準備研究会／教育機関35校、企業関係9社（参加者約140名） ※主な内容／講演、事例報告、FOLC会則承認、FOLCへの各種登録申請について

2004年4月開催の準備会合を皮切りに研究会やシンポジウムなど、「表2」に掲げる活動を展開してきた。

オンデマンド授業の流通を実現しさらに拡大・普及するためには、〈高等教育機関のみならず産業界をふくめた幅広い英知を結集する〉ことが不可欠である。ゆえに、めざすべき教育の高度化、多様化、オープン化に対応する教育効果向上の仕組みづくりのビジョンをできるだけ多くの関係諸機関に理解し賛同してもらえるよう、上記に示したように1年をかけて呼びかけ、FOLCの設立に至ったのである。

6．オンデマンド授業流通フォーラムの現状と将来

6.1　フォーラムの実態

FOLCでは設立以後、円滑なフォーラムの運営およびオンデマンド授業の普及促進をはかるために、運営協議会や説明会やシンポジウムを開催し、また共同評価実験の実施、企業等支援科目の提供団体の開拓ほか普及活動・広報活動をつうじてオンデマンド授業に関する各機関の取り組み事例の共有化、授業を担当する教員に対する支援態勢の構築に力を注いでいる。

FOLCの主な役割は会則に定められているように、配信校が登録した配信科目を会員（受信校）に公開し、オンデマンド授業の流通が円滑に実施されるように基盤整備を行うことである。オンデマンド授業を実際に流通させる主体はフォーラムに登録した会員で、配信校、受信校となる高等教育機関ならびにコンテンツ制作、授業配信の実務を担う協力会社である（図1参照）。

オンデマンド授業の流通は、具体的にはフォーラムが提示したガイドラインに沿って各機関がそれぞれのシステムを用いて独自に行うことになるので、そのガイドラ

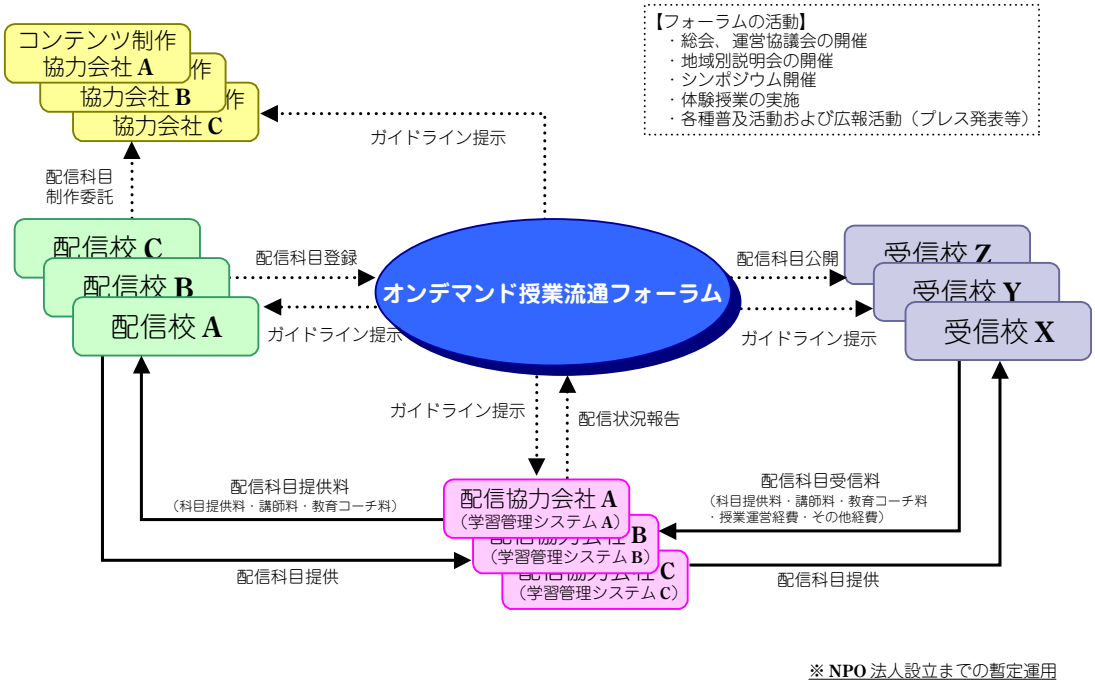


図1　オンデマンド授業流通フォーラムの枠組み

インのポイントを要約して紹介する。

〈関係機関・関係者の役割について〉

・配信校の担当教員は、受信校の非常勤講師として授業を運営。教育コーチを選定し学生の質問に対応（教育コーチに対する指示）、ディスカッションのテーマ設定および討議内容に対するフォローを行う。

・教育コーチは授業内容に精通し、講義に関する質問への回答やディスカッションをリードする。

・受信校は、フォーラムに公開された配信科目から受信科目を決定し、授業運営に必要な事務処理および受講環境整備を行う。

・コンテンツ制作協力会社は、配信校・担当教員と協議し、制作する講義コンテンツの種類、制作方法、スケジュールを決定し、コンテンツの制作（講義の収録、エンコード、編集、動作確認、等）を行う。

・配信協力会社は、学習管理システムを提供するとともに授業運営に必要な各種設定（科目の登録、講義・テスト・レポート・BBS・アンケート等の設定、受講学生の登録、等）を行う。有料の場合は、受信校からの配信科目受信料の徴収ならびに配信校に対する配信科目提供料の納入を行う。

〈オンデマンド授業について〉

・オンデマンド授業はインターネットを介して実施される大学・短期大学・大学院で単位授与可能な正規授業とし、単位を授与しない公開講座やエクステンション講座等は対象外とする。原則としてすべての講義がインターネットを介して実施されるものとする。担当教員と学生間の双方向性を確保するため、オープンな環境で質疑応答やディスカッションを行うことができるBBSを併設する。授業を効果的に実施するために、担当教員と教育コーチのチームティーチング方式を原則とする。

・科目は、半期2単位で、15回で構成することを原則とする。学生の受講動機を維持向上させるためにも、授業期間中に何回かのリアルタイム方式のディスカッションを組み込むことが望ましい。

〈講義コンテンツについて〉

・講義コンテンツ制作にかかる費用（著作権処理費用を含む）は配信校が負担する。

・教材として担当教員以外の第三者による著作物を用いる場合には、配信校の責任で事前に著作権処理を完了する。

・講義コンテンツの再生にあたり、有償もしくは入手困難なソフトウェア・ハードウェアの使用は避ける。動画を用いる場合にはストリーミング方式で配信する（ダウンロード方式は著作権上不可）。

〈科目設置形態について〉

・オンデマンド授業の実施にあたり、配信科目は受信校の正規科目とする。同時に、担当教員は受信校における非常勤講師となる。

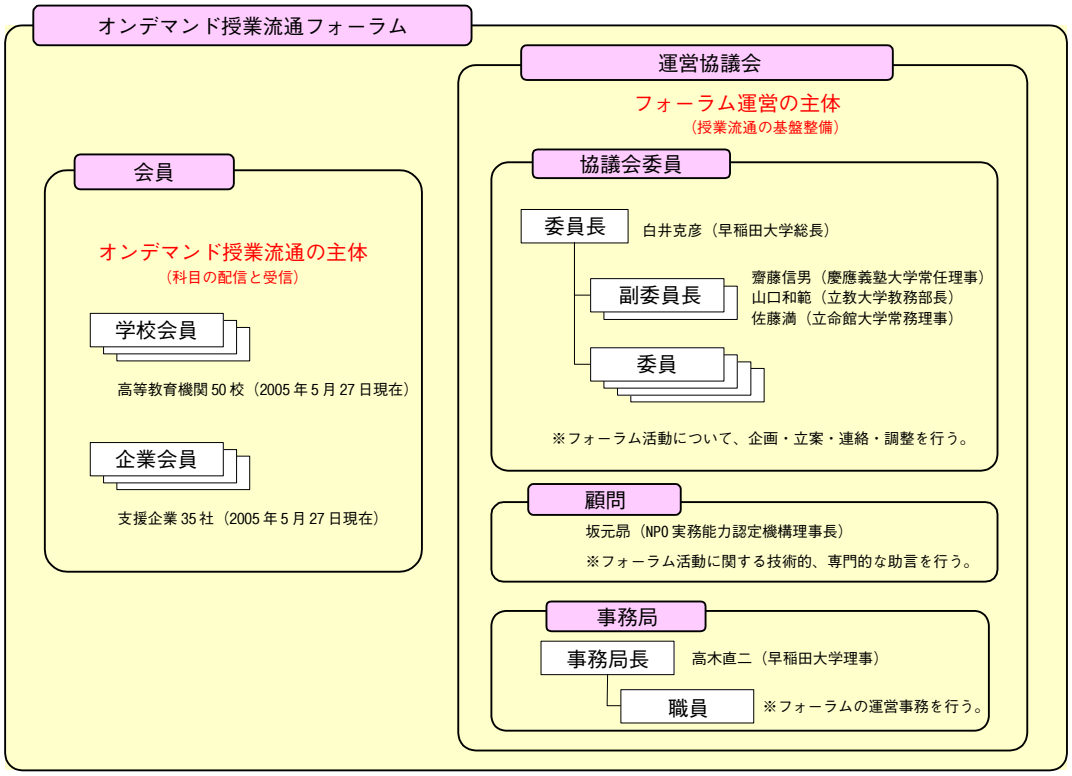


図2　FOLC組織図

〈配信科目受信料について〉

・配信科目受信料は、配信校に対する科目提供、担当教員に対する講師料、教育コーチに対する教育コーチ料、配信協力会社に対する授業運営経費・その他経費により構成される。配信科目受信料には受信校におけるインターネット接続環境および受講用パソコンにかかる費用は含まない（受信校が提供）。

〈企業等支援科目について〉

・企業等（民間企業、公益法人）の支援により制作された講義コンテンツについては、配信校が著作権、所有権を保有する。講義コンテンツには学生の目に触れる位置に支援企業等の名称やバナーを設定することができる。企業等支援科目の中には、企業や公益法人などが講義コンテンツを制作し、配信校を通じて配信する科目もあり得る。

FOLCは図2の組織図をみればわかるように、オンデマンド授業の流通（配信・受信）を希望する機関が会員の届出をし、それが運営協議会による承認を得られれば、会則、運営ガイドラインに沿って＜オンデマンド授業コンテンツ流通＞のためのプラットフォームを自由に活用できるしくみとなっている。このフォーラムを有効に活用すれば、個性を生かしながらカリキュラムの充実をはかることも可能で、配信の側に回ればむしろ各大学の個性を外に発信する絶好の機会ともなるはずである。

6.2　フォーラムの将来と課題

FOLCに求められる役割は、会員の活発な活動すなわちオンデマンド授業流通の核となることである。したがって、当面はその環境づくりに力を傾注し、説明会の開催や体験授業の実施などを通じて参加校（配信校・受信校）とともに良質のオンデマンド授業科目の増大をはかることである。同時に、授業コンテンツを制作する寄附講座団体（企業、団体、行政機関など）を開拓し拡大することに重点をおいた活動を展開していく予定である。質的に優れたオンデマンド授業を広く流通させることによって、これにたずさわる担当教員をはじめとする高等教育関係者がそれぞれの組織の枠を超えて意見を交換する土壌が生まれてくれば、自ずから将来の展望が開かれていくものと考えられる。

2005年6月の時点でFOLCに登録されている会員数は学校関係50機関、企業関係36社、オンデマンド授業の登録科目数は21科目だが、将来的には2008年度をめどに学校会員100機関、登録科目数100科目とする計画である。同時に、運営協議会事務局をNPO法人化する方向も検討し準備を進めている。

この間にオンデマンド授業の普及に向けて取り組むべき課題としては、FOLC設立時に「フォーラム運営ガイドライン」を定めているものの、そのいくつかの項目についてはさらに検討を加え充実させるものがあることだ。たとえば、授業品質管理の方法、教育コーチの人材確保と育成方法、著作権の管理方法、などが挙げられる。とくに重点が置かれるのは、教育コーチの人材確保と育成方法であろう。オンデマンド授業を「個別指導による問題発掘・解決型の新しいスタイルの教育」として成立させるキーポイントといっても過言ではなく、授業の品質を維持向上させる上からも、客観的に評価できる基準を設け、また、組織的にその育成をはかる必要も指摘されている。

いずれにせよ、FOLCのオンデマンド授業流通の本格的な活動は始まったばかりで、関係機関の理解と賛同を得ながら地道な活動を進めることが重要である。

7. まとめ

大学は、純粋に学問を探求する場を確保する一方で、社会が求める専門知識を身につけた優秀な人材を養成するという高等教育機関としての役割を担っている。この使命を全うするための方策が模索されているなかで、それを実践する“具体的なしくみ”が構築されることが求められている。

高等教育機関が早急に対処すべき課題としてまず挙げられるのは、学ぶ側から要請されている「ニーズにマッチした科目選択」を可能とするメニューの多様化、そして一方通行となりがちな知識伝達型授業で占められた「教育方法の改善」である。また、少子高齢化の時代を迎えつつあるなかで多様な学習機会の場の提供も強く求められている。しかし、すでに触れてきたように改善努力の負荷を個々の教員にのみかけることはできない。また、各大学単独の努力だけでは、高度化、多様化、オープン化に対応する新たな教育効果向上のしくみを構築することは困難な状況にある。FOLCが、まさに“具体的なしくみ”のひとつとしてオンデマンド授業を位置付け、その流通の体系化をはかることを目的としている理由もここにある。

このようなFOLCの活動を拡大することによって、「教育機関の連携による知の共創と共有」と「それぞれの教育機関における特色強化」をはかり、「魅力ある教育メニュー提供による学生満足度向上」、「新しい教育スタイルの普及による教育改革実現」、「高等教育のオープン化による社会への貢献」という困難な課題が克服されることを期待している。

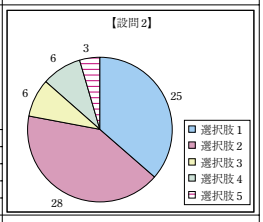
（平成17年8月3日受付）

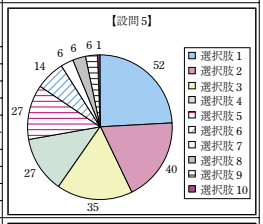
【付録】

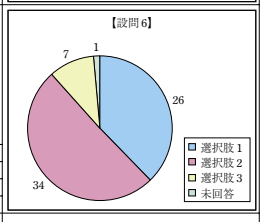
◇オンデマンド授業アンケート結果（2005年度前期）※対象：オンデマンド授業流通フォーラム関連科目

〈授業期間〉2005年4月11日～2005年7月24日
〈受講機関〉4校〈受講科目〉4科目（1校1科目）
〈受講者数〉161名
〈回答者数〉68名　回答率42.2%

設問科目	回答数	構成比
【設問1】：この科目を履修した理由を教えてください。		＜別項参照＞
【設問2】：授業内容に興味は持てましたか？		
1　非常に興味がもてた	25	36.8%
2　まあまあ興味がもてた	28	41.2%
3　どちらとも言えない	6	8.8%
4　あまり興味がもてなかった	6	8.8%
5　全く興味がもてなかった	3	4.4%
【設問3】：毎回の講義ごとのBBSに関する感想をご記入ください。		＜別項参照＞
【設問4】：授業内容に関する感想をご記入ください。		＜別項参照＞
【設問5】：この科目を受講して、ご自分が該当すると思う回答をお選びください。（複数回答可）		
1　いつでも、どこからでも受講できることが良かった	52	76.4%
2　講義を繰り返して何度でも受講できることが良かった	40	58.8%
3　レポート、テストがオンラインでできる効率的である	35	51.5%
4　講義、教材がわかりやすかった	27	39.7%
5　BBSによって発言がしやすい	27	39.7%
6　授業時間を自分で決めるため学習のペースを持ちにくい	14	20.6%
7　教室授業ほど臨場感がもてない	6	8.8%
8　講義、教材がわかりにくかった	6	8.8%
9　BBSではコミュニケーションが図れない	6	8.8%
10　その他（設問7の自由記述でお書きください）	1	1.5%
【設問6】：オンデマンド授業という教育方法には、教育的効果があると思いますか？		
1　通常の集合授業（教室授業）以上の教育的効果がある	26	38.2%
2　通常の集合授業（教室授業）と同程度の教育的効果がある	34	50.0%
3　通常の集合授業（教室授業）よりは教育的効果が低い	7	10.3%
4　未回答	1	1.5%
【設問7】：オンデマンド授業について感じたことをご記入ください。		＜別項参照＞
【設問8】：今回の受講を通じて問題点あるいは改善要望があればご記入ください。		＜別項参照＞







【設問1】：この科目を履修した理由を教えてください。

1　異文化について学びたかったし、受講時間をこちらで決められることが魅力的だったため。
2　近年グローバル化が進み海外に行く機会も増え日本以外の国についての文化、習慣について学びたかったから。
3　進化生物学を応用した経営学、経済学に興味があったものの、進化生物学の根本概念みたいなものに触れられている研究が乏しかったため。
4　オンデマンド授業を受けてみたかったから。
5　「オンデマンド授業」という授業形態に興味を持って。
6　受講時間を自分で自由に設定できるため。
7　初のオンデマンド授業であることと、授業内容に興味が湧いたから。
8　教室で受ける授業が、うるさすぎて嫌気がさしていたため、静かな環境で受けられ、何度でも視聴できる授業というのは魅力的だと思ったから。
9　課外活動等で授業時間の都合がつかないため、また正課で都合のつく時間帯にこれより興味の持てる科目がなかったため。
10　初めてのオンデマンド授業であったこと。また、自由な時間にできる。さらに、自分たちの専門に近い科目であったことなどが理由です。
11　進化生物学が自分の専門に近かったことと、オンデマンド授業というのがどのようなものかと興味があった。
12　進化、と言う現象に興味があったため。
13　オンデマンド授業に興味があったから。他大学の授業にも関心があったから。
14　生命理学科なので、進化生物学に興味があったから。あと、学校が遠いので、家で受講できるというのも非常に魅力的でしたっ!!
15　生物学者として有名な長谷川先生の授業が聞きたかった。オンデマンド授業という形態が便利だと思った。

【設問3】：毎回の講義ごとのBBSに関する感想をご記入ください。

1　教育コーチに書き込みを読んでもらい、感想を頂き大変感謝している。
2　他の学生の意見なども参考になり、よかったと思います。
3　皆さんの考えを知ることができて良かったです。
4　疑問に思ったことなどを毎回の講義ごとのBBSで書き込みができるのでよいと思う。
5　近未来的でとてもよかった。
6　思ったことを書いただけだったけど、あまり苦にはならなかった。
7　BBSのよい点は、相手の顔が見えない分、思い切って発言できる点です。また時間を気にしないですむというのも大きいでしょう。リアルな講義よりもよっぽど深い議論が出来たと思います。
　逆に、講義ごとのBBSだと議題の継続性という点に関してはもろいと思います。講義を通じたフリーのBBSが別立てであればなおよいと思います。
8　あまり参加していない
9　BBSも良いと思いますが、書き込み方に慣れていないとやりにくい部分もあると感じました。
10　他の人の状況や考え方が非常に参考になりました。
11　いろんな人の意見を知る事ができるのが、自分の考えと比較できる点でとても良かった。
12　理解することで精一杯で疑問が浮かばないと、「何か書かないといけないのかな？でも何を書いていいか分からない」と動揺しました。その結果、感想ばかりになってしまって申し訳なかったと思います…。
13　質問と回答が適度に行われているのでは。
14　なかなか活発な議論になるのは難しいとは思うのですが、十分に機能していたと思います。
15　忙しくて毎回は書き込みが出来なかったが、いろんな人の意見とTAの方の解説が分かり、良かったと思う。
16　講義が毎回ギリギリで受講する人が多く、あまり活発な議論がなされず残念だったが、指導コーチからの回答があり、授業を理解するうえでとても参考になった。
17　BBSに書きたいと思う内容は多々あったのだが、それが他人から見て低レベルすぎないかということが常に気になってしまっていた。期末討議が非常に面白かったので、毎回BBSという形に限定するのではなく、チャットに似た形態で他の受講生とコメントし合えるともっと面白かったかもしれないと思えた。
18　忙しくて書けないことの方が多かったけど、とっても有意義だったと思います。
19　質問しやすく、返事もちゃんと来るので良かった。

【設問4】：授業内容に関する感想をご記入ください。

1　とても楽しく、有意義な内容だった！
2　食事のマナーや色などについての違いなど、とても驚いたこともあって勉強になりました。
3　身近な内容で興味を持つことができました。
4　日本にいてはわからない異文化のことをこの授業をとおして知ることができ、非常に面白かった。
5　わかりやすく、いつでも受けられるし、わからないところをなんどでも繰り返せるところがよかった。
6　自分は授業で出てきたものはノートにすべて書き残していたので内容が分からないなどということはなかった。毎週回ごとにまとめられていたので理解できた。
7　少し、難しいなと思いました。
8　自分の周りでは、尊厳死・安楽死で亡くなった人がいないので、考えたことはなかったが、これから生きていくなかでいつかは考えなければいけないことなのでとても参考になった。
9　医療への不信感が持てました。
10　内容が難しすぎてあまり理解することができなかった。
11　改めて感じたことや知らなかったことなど興味をもって講義に取り組むことができました。
12　バイオ関係は好きなので、やりやすかった。
13　難しい内容ばかりでしたが、普通に過ごしていては知ることがなかった情報もたくさんありました。
　どこまでこれからに活かせるか分かりませんが、そのときが来るまでは頭にとめておきたいと思いました。
14　私には少し難しかったです。でも授業を聞いて今まで考えたりしなかった事を考えるのは良いと思いました。
15　興味が持てず、面白みが感じられない。
16　興味を持てる内容だったので真剣に取り組むことが出来ました。
17　医療関係に関わりのある授業内容があったので、とても勉強になりました。
18　少し難しかったけど、ためになることばっかりでした。
19　すごく難しかった。
20　とても大切なことばかりでした。
21　難しかった。しかしそのぶん資料で調べる機会が多くとれた。
22　バイオエシックスを初めて聞いて、どんなものか分かりませんでした。受講し、バイオエシックスが私たちの身近にあることを知りました。内容は凄く考えさせられる事ばかりでした。

23　どれも難しい内容でテーマによっては答えが出ることのないことで本当に考えさせられた。
　これからも真剣に取り組んでいかなければならない問題だと実感した。
24　バイオエシクッスという内容が難しかったです。でも当たり前にありうる話なんだと思い、すごく勉強になりました。
25　初めてバイオエシックスという勉強をして広く知識を深めることができたと思います。
26　講義の説明などとてもわかりやすくて良かったです。
27　知らないことをたくさん知ることができた。
28　医療事務の仕事をしたいと思っているので、ためになる講義内容でよかったです。
29　難しいことなどあったけど、とてもためになる講義だった。
30　とても難しかったです。この授業で初めて「バイオエシックス」という言葉を覚えましたし意味も学べましたが､やはり難しいという感じは変わりません。
31　人工中絶の討論会はとても楽しかったです。
32　最初はバイオエシックスって何？と思っていたけれど、やってみて少しずつわかるようになり楽しくなりました。
33　インフォームド・コンセントやケアについての講義が印象に残り、将来に活かせるのではないかと思った。
34　難しい授業でした。でも何回か授業を聞いたら大体意味が分かってきて、興味を持ちました。
35　バイオエシックスのことを勉強して、前に考えないことをよく見ると、いい経験になりました。
36　人間は命を大事にすべきです。このことは授業を受けてからもっとわかりました。
37　この授業を受けて良かったと思います。いろいろな勉強になりました。
38　命の大切さがわかりました。

【設問7】：オンデマンド授業について感じたことをご記入ください。

1　自分のペースで授業が受けられ、教室では不可能な事もオンデマンドでは実現できていた。今後更なる発展を期待。
2　他の大学の生徒とも意見交換ができる機会があり、他の人がどう思っているのか、こういう考えもあるんだな、ということもあってよかったと思います。
3　学校の講義のように時間が決められていないので、自分の好きな時間に講義を受けることができたことが非常によかった。
4　自分の空いてる時間のときに学習できるからよかった。
5　自分の都合でいつでも授業が受けられてやりやすかった。
6　パソコンがあればどこからでもできるのでとても良い!!
7　興味ぶかい話もあっておもしろかった。
8　時間のあるとき、自分の時間内でできる。
9　パソコンがない人や、電話回線でインターネットを繋いでいる人は見られないのが不便だなと感じました。
10　やりたい人だけが講義を受ければいい。
11　普通の授業とは違い一人一人の意見を求めてくるのでそれに関しては良かったと思う。
12　命について考えがとても深まりました。最初は内容が難しく感じましたが、今では自分なりに内容を理解出来ていると思います。
13　楽しかった。
14　直接声に出していえない分、文字にして意見を交換し合えることが良いと思いました。
15　どこでも受講でき、便利だと思いました。
16　1週間単位で次の講義にうつるのは早いと思う。
17　顔が見えないから自分の意見がBBSに書き込みやすかった。時間がある時繰り返し授業が見られてよかった。
18　普段あまり考える機会がないことを、オンデマンド授業システムで学べることが出来るので、これからもこのような形式の授業は行うべきだと思う。
19　はっきり言ってすごく大変でした。今、就職活動しているので受講できない日が何回かあり残念でした…。この授業は､先生の言ったことが聞き取れない･書き取れないということがなく、やりやすい授業だったと思います。発言もBBSなので言いやすかったです。
20　とても難しかったです。
21　一人で集中してできるため集中できていいと思います。
22　今回の授業以外に他の教科の授業を受けてみたいです。
23　すごく勉強になったと思う。
24　どんなに忙しい場合でもオンデマンドというのは時間関係なく講義が出来るのでとても便利だと思いました。
25　普通の授業ですとどんなに眠くても受けなければなりませんが、オンデマンドだと自分の都合の良い時に受けられるので、集中して授業を受けられたので良かった
26　どこでも受けられることがよかったです。
27　一生懸命説明してくれているんだなということは分かっていたつもりなんですけど、自分にとっては少々難しかったです。

28　BBSによって色々な人の意見を聞けてよかった。医療についていろいろ知ることができてよかった。
29　時間に限られず、いつでもどこでも受けることができるから便利で良いと思います。
30　授業を何回も繰り返して見ることができるから、わからない部分を辞書で調べる時間があっていいと思いました。
31　時間が自由に選択できる勉強がとてもよかったと思います。
32　オンデマンド授業は普段の授業よりわかりやすいと思います。
33　とても便利で、いつでも、どこでも受けますから、何回でも繰り返し聞くこともできます。
34　この授業は通信教育として新鮮だと感じました

【設問8】：今回の受講を通じて問題点あるいは改善要望があればご記入ください。

1　討論に参加しづらかった。
2　討論ではやはり大学間での差がよく見て取ることが出来た。
3　質問や疑問点がその場で聞けないことが不便だった。
4　一回の講義時間が長くて、興味のないテーマだったり、内容が難しいと飽きる。
5　討論会の日程や時間帯を増やして欲しいと思いました。
6　1週間単位では早い。特にレポートの時はもう少し期間を広く設定してほしい。
7　バイオエシックスが主体となっているため、内容が少し重く感じられることもあった。講義に取り組むことが辛く感じることもあった。
8　もう少し受講できる期間が長いといいと思いました。
9　授業内容が難しすぎた。
10　討論の時間が短くバイトなどで参加できなかったのがとても残念だったので、もう少し夜遅くまでやって欲しいです。
11　バイオエシックスというテーマは少し難しく感じた。
12　今回の授業の内容は少々難しく、留学生にとっては理解することがちょっと大変でした。
13　外国人には言葉が難しく、理解できない場合が多い。（留学生）

◇オンデマンド授業流通フォーラム　2005年度授業運営状況（2005年4月現在）

【2005年度授業運営状況】

配信校	講座提供企業	配信科目名	受信校	授業実施期
江戸川大学	−	情報デザイン論	早稲田大学	後期
	−	都市アメニティ論	早稲田大学	後期
吉備国際大学	−	文化財から学ぶ歴史と科学	早稲田大学	後期
日本福祉大学	−	福祉社会入門	早稲田大学	後期
立教大学	−	青年期の自我と恋愛	早稲田大学	後期
立命館大学	−	科学的な見方・考え方	早稲田大学	前期
早稲田大学	(株)NHKエンタープライズ21 (株)エバグリーン・デジタル・コンテンツ	地球大進化	早稲田大学	前期
	NTTコムウェア(株)	オープン・ソース・ソフトウエア入門	早稲田大学	後期
	(株)コーポレートディレクション	企業実務概論 ビジネス思考の基礎Ⅰ・Ⅱ	早稲田大学	前期・後期
	(株)コーポレートディレクション	企業実務特論 マーケティング・ベーシック	早稲田大学	前期
	財団法人日本漢字能力検定協会	アカデミックライティング演習講座	早稲田大学	後期
	−	異文化コミュニケーション論	吉備国際大学	前期
	−		横浜創英短期大学	後期
	−	進化生物学	九州保健福祉大学	前期
	−		立教大学	前期
	−	バイオエシックス	九州保健福祉大学	後期
	−		横浜創英短期大学	前期
	−	文化と開発	吉備国際大学	後期

高木　直二
学歴
1976年3月早稲田大学第二文学部卒業
職歴
1986年12月同大学事務システム開発室調査役、1992年6月同大学教務部将来計画審議会（第二次）事務局調査役、1993年12月同大学教務部教育研究助成担当課長、1996年6月同大学第一文学部事務長兼大学院文学研究科事務長、1998年11月同大学メディアネットワークセンター事務部長、2000年12月同大学教務部事務部長、2002年11月同大学理事（現在に至る）

A Challenge by the Forum for On-demand Lecture Circulation (FOLC) to create a new form of education

Takagi Naoji

Waseda University is striving to develop and spread a new style of e-Learning, known as the "On-demand lecture system." The lectures are recorded at a studio and provided to students through the internet, allowing the students to study anywhere and at any time they like. Today, on-demand lectures are acknowledged as a regular method of university education. We are expecting that more courses will be provided by this method in the near future.

At Waseda University, where the writer of this article works as the Executive Director in charge of academic-industrial collaboration, a correspondence course in which all the classes are given in the form of on-demand lectures started in April 2003. Furthermore, many classes in the attendance courses are also provided by means of the on-demand lecture system. From a global perspective, it can be said that this system is starting to be recognized as an accepted method of education provision. However, in Japan, the on-demand lecture system is still at its developing stage because of the restrictions and subjects related to technical matters, cost and operation. In order to widely spread the use of the on-demand lecture system and meet the demands of students studying under various environments, it is essential to enhance collaboration between universities and industries.

The Forum for On-demand Lecture Circulation (FOLC) was established in April 2005 to promote the academic-industrial collaboration. In this article, we will examine the characteristics, educational effects, implementation status and the problems of on-demand lectures. We will also consider the future prospects of the FOLC and introduce the promotional activities carried out by FOLC to spread the on-demand lecture system in the higher education field.

Keywords
On-demand lectures, dual communication, LMS (Learning Management System), Education Coach, The Forum for On-demand Lecture Circulation